平成26年12月10日発行　第17号

三医看同窓会報

発　行　三医看同窓会編集部 津市江戸橋2丁目　　デザイン　株式会社 サラト http://www.salat.co.jp/

ごあいさつ

同窓会会長
前山和子

三医看同窓会会員の皆さまには、ますますご健勝でご活躍のこととお慶び申し上げます。

私は、平成25年度から会長を務めております前山と申します。他の役員の皆さまに支えていただきながら同窓会運営ができておりますことをありがたく思っています。役員一同、よろしくお願い申し上げます。

このたび、会員の皆さまのご協力を得て、三医看同窓会報第17号を発行することができました。ご覧になっていただき、懐かしい日々を思い出していただければ幸いです。原稿を書いてくださいました皆さま、ありがとうございました。

さて、今年の6月に「地域における医療及び介護の総合的な確保を推進するための関係法律の整備等に関する法律」が成立したことは皆さまもご承知のことと思います。これは、団塊世代が75歳を迎える2025年問題や日本の将来人口が減少する社会を見据えたもので、看護職に直接関係するものです。病床機能報告制度や看護師等が離職した際のナースセンターへの届出制度などが盛り込まれています。この法律に関連して、医療現場では特定行為に係る看護師の研修制度について、保健師看護師助産師法改正に向けた議論が進んでいます。また、地域では、在宅医療の充実・地域包括ケアシステムの構築が進み、保健師や訪問看護師にとって大きな役割が期待されています。私たち看護職は、この時代の潮流に乗りながら、住民の健康課題と向き合い、看護の専門性を発揮することが求められています。

こうした急激に変化する社会状況の中、医療・保健・福祉・教育・産業、そして地域で、三医看同窓生の仲間が2，500人もいることは、非常にこころ強い思いがあります。看護職としていろいろな分野で活躍してみえる先輩諸姉、また後輩の皆さま方も見えるでしょうが、同窓生というだけで通じ合うものがあります。互いに交流を深めながら、これからの看護の発展に寄与していきたいものです。

会員皆さまのご健康とご活躍をお祈りいたします。

最後に、三医看同窓会の目的でもあります「会員相互の知識及び技術の向上、会員相互の親睦を図る」ために、皆さまのご支援、ご協力をよろしくお願いします。

平成25～27年度　三医看同窓会役員名簿

会　長	前山　和子	国立２	会　計	冨田　真由	医短９
副会長	中桐　康子	国立４	〃	浦和　愛子	学部２
書　記	種田ゆかり	医短６	会計監査	中田　花契	学部１
〃	本田　直子	学部２	〃	林　　暁子	学部１

三医看同窓会のホームページを2011年より開設しております。
総会、同窓会会報の発行のお知らせ等をさせていただきます。
不定期の更新ですが、ご覧ください。
また、住所変更もできますのでご利用ください。

【公式ホームページ】
http://www.dosokai.ne.jp/sanikandosokai/

太郎地域づくり協議会の参加から

国立10期生　竹森さわか

私は今、津市健康づくり課、久居保健センターで保健師として働いています。

住居は、映画「WOOD！JOB」のロケ地にもなりました。津市美杉町太郎生です。

この太郎生地区は、美杉地域の中でも、高齢化率の低いところですが、小学校の廃校、保育所の休園と、過疎・高齢化が超ハイスピードで進んでいます。私が、定年を迎える頃、どれだけの人口だろうか、空家は増え、山や田畑は荒れ放題、鹿や、猿等の被害におびえ暮らしているのだろうと思う。今は、PTA活動もはなれ、地域とのつながりが希薄していく中、老人クラブ活動までは先は長い。今は、片道、車で1時間の通勤の繰り返し、定年後の自分は、この地域を愛せるだろうか、と不安でいっぱいです。でも私は、おいしい空気のこの地域で暮らしたいのです。

このような問題を、地域で考え、地域を再生しようと3年前から、「太郎生地域づくり協議会」の一員として活動しています。これは、行政が、自分たちの住む地域を、自分たちで、地域の問題点を抽出し、アセスメントし、行動計画を立て、実施していく力をつけるためのプロジェクトです。(保健師活動のプロセスと同じ)。最初は、行政側で、プロジェクトの仕掛けをしていましたが、自分の地域は、仕掛けられる側になりました。それは、自分の住むこの太郎生地域の再生を人任せにしたくない、行政のかかわりを、住民側からみてみようと思ったからです。おかげで、年齢層も広く、さまざまな経歴をお持ちの方々から、学ぶことが楽しいです。

協議会の活動内容は、空家を活かして『たろっと(太郎生人)三国屋』という施設を拠点に、地元の方や太郎地域以外の方との交流として田舎暮らし体験塾、落語会。アジサイ、つつじの植え付け、森林セラピーロードの散策等です。

この施設は、お食事、宿泊もできるところです。ぜひ、こころとからだのメンテナンスにご利用ください。「たろっと三国屋」で検索していただくと、詳細がわかりますよ。

近況報告

学部1期生　奥山　真由

ドクターヘリ事業が始まって3年目を迎えています。そして私自身はフライトナースになって約半年が過ぎたところです。日々緊張と不安を抱きながら、しかし同時に、私達医療者が現場に行くことで早期治療・救命につながるこの仕事にやりがいも感じています。

フライト業務は、毎朝の医療器具の準備・点検から始まります。そして要請があれば4分以内を目標に離陸し、現場へ向かいます。傷病者やどこへ向かうのかといった情報は、離陸後に無線を通して得ます。現場までは5分～20分程度と様々で、その限られた時間の中で、得た情報から傷病者の状態を予測し、医師と相談しながら治療の準備をします。

ある日の要請は、車対自転車事故で、自転車側に対するものでした。頭部から大腿までの全身の内外損傷、大量出血の可能性等を

想定して現場に向かいました。実際の患者さんは、頭部や両手など複数箇所から出血し、ややパニック状態で安静が保てない状態でした。その為、今後頭部外傷による意識レベルの低下が予測され、また途中で暴れてしまい安全な飛行ができないかもしれないという医師の判断の元、鎮静・挿管という治療選択をしました。その後病院へ搬送し、集中治療が行われ、大きな後遺症もなく転院となりました。

ドクターヘリの場合、医師も看護師も1名しかおらず、更に利用できる医療資源も限られていることから、お互いの信頼関係や連携は必要不可欠です。また、ドクターヘリの目的は、「早期治療の開始と、治療を継続しながらの早期医療施設への搬送」であり、時間との戦いでもあります。フライトナースは、診療の補助に加え、突然受傷し、ヘリに乗ることになった患者さんの精神的ケアや家族の連絡先の把握、現場活動の記録といった複数の仕事を同時進行で行なう必要があり、これら全てを15分程度の現場滞在時間で行うには、救急隊や消防、パイロットや整備士、通信担当者といった多職種との連携も欠かせません。とは言え、症例毎に状況は異なり、気持ちが焦りスムーズにいかないことも多く、課題は山積みです。その為、毎回の現場活動から学び、少しでも患者さんの救命につながるようにこれからも努力していきたいと思います。

大学教育における社会人基礎力の育成

学部１期生　林　暁子

近年、医療現場では少子高齢化における医療の高度化、在院日数の短縮化、医療安全に対する意識の高まりなどの社会のニーズへの対応が求められており、その対応としてチーム医療の推進が重要視されています。チーム医療を推進するには、各医療スタッフがそれぞれの専門的能力を向上させ、それぞれの役割を発揮し、他の医療スタッフと連携し合うことが求められ、看護職は最も患者の身近にいる存在として、チーム内のコーディネーター的役割を担う存在と言われています。その役割を遂行するために、看護師には人々と共に仕事をしていくための基礎的な力である「社会人基礎力」が重要であるとも言われています。

「社会人基礎力」とは、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の３つの能力（12の能力要素）から構成されており、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として、２００６年に経済産業省から提唱された概念です。看護師にとって「社会人基礎力」はチーム医療における人間関係の構築に発揮されるだけでなく、自律した専門性の発揮にも基礎的な能力でもあり、この能力を育成することにより、「自律した姿勢」や「主体性」「あきらめない姿勢」「粘り強く葛藤やダメージを乗り越えていける力」が身につくとされ、早期離職の予防にもつながるとされています。

今春、鈴鹿医療科学大学に看護学部看護学科が新設されました。鈴鹿医療科学大学は、医師以外の医療福祉に携わる全ての専門職者を養成する医療福祉総合大学であり「知性と人間性を兼ね備えた医療・福祉スペシャリストの養成」を大学理念とし、全学部全学科の学生を対象に、１年次から医療人の基盤となる資質を形成するためのプログラムとして「医療人底力教育」を今年度より開始しました。このプログラムを通し、社会人基礎力を育成するとともに、医療チームのなかの看護師の役割を知り、各職種の専門性を学んだ他学部他学科の学生とともに医療人として協働することの基礎を修得することを目指しています。また、看護学部看護学科では、カリキュラムポリシーの第１に「看護実践能力の育成」を掲げています。本年４月に看護学科新設と同時に本学に着任し、これまでの臨床経験を活かしながら臨床に即した個別的で安全で確実な看護実践能力を身につけた看護専門職者の育成に努めていきたいと思います。

パートナーシップナーシングシステム導入への取り組み

医短4期生　高口　有香子

パートナーシップナーシングシステム（以下PNS）とは、看護師2名がパートナーを組み「それぞれの得意分野を活かしながら協力しあうこと」「互いの持ち味を活かし合理的な課題解決の枠組み」である看護方式が、福井大学医学部附属病院にて考案されました。PNSの利点として、お互いの知識を合わせ、その時点での最良の選択ができることや、勤務時間を有効につかえるといったことなどが挙げられます。

新病院へ移転と共に、病棟編成が臓器別へと変更となりました。慣れない職場環境、外科・内科の混合病棟になったことで、看護師が求められる知識・技術の範囲も広くなります。配属された看護師の得意分野も外科・内科とそれぞれで、お互いが協力しなければ、看護が提供できないといった状況がありました。私が所属していた病棟も慣れない環境の中、個々の仕事を抱えながら、勤務者同士がお互いに協力しなければ看護ができないような効率の悪い状況であり、勤務者は疲弊した状態が続いていました。このような職場環境を何とかできないか？看護師が疲れた状況であれば、ミスもおこりやすく、患者さんを元気にできないなどの思いもありPNS導入を考え、実践に向け取り組みを開始しました。実際、看護師2名がペアとなり実践を始めると、「1人でやった方が効率が良い」「2人でみると担当患者も多く、情報収集から負担」「患者さんにも威圧感を与えるのでは」など、負担に感じるスタッフがいる反面、「1人では不安だったけど2人の方が、すぐに相談できて安心」「いろんな看護を近くでみられて楽しい」など良い反応を示すスタッフもおり両極にわかれています。患者さんからは「看護師2人にみてもらえるなんて安心」「相談しながらしてもらえるから良い」などの言葉がかえってきています。

経験年数の違う看護師がパートナーとなり看護を展開していくことが求められるため、どうしても教育的な視点となってしまいがちです。しかし、経験年数がなくても看護師として良い感性をもったスタッフも多くいます。まだまだ課題は山積みですが、看護師同士がお互いの良いところを認め合い、尊重し合い、良い看護が提供できるようにしていきたいと考えています。PNS導入にむけ少しずつ看護体制が整えられるように頑張っていきたいと思います。

三重県看護協会長に就任して

国立2期生　藤田せつ子

同窓会報へ寄稿させていただく機会を与えてくださいましたことお礼申し上げます。

私事でありますが、本年60歳の還暦を迎えました。諸先輩の皆様からは、「まだまだひよっこね」と聞こえてきそうです。60歳からの再スタートをしておられる諸先輩は沢山おられます。さあ、私も何かにチャレンジしたいと思います。

看護学校を卒業し、三重大学医学部附属病院へ就職し、併せて22年間大変お世話になりました。その後、平成7年4月から、地方自治体で新しく市立病院を作るために、名張市の職員になり、そこでは13年間お世話になりました。平成20年4月から縁あって、三重県看護協会でお仕事をさせていただくこととなり、平成25年6月25日、水谷会長から重い・想いバトンをいただき現在に至っております。また現在は、日々同窓会の諸先輩の皆様、看護協会の会員の皆様、看護協会の職員に支えていただいておりますこと、改めて感謝申し上げる次第でございます。

さて、去る6月の国会で医療介護総合確保推進法が成立しました。主な改正事項としましては、①「特定行為に係る看護師の研修制度」の創設、②看護職員確保対策としてのナースセンターへの届け出制度の創設、③病床機能（高度急性期、急性期、回復期、慢性期）報告制度の創設、④医療事故に係る調査制度の創設などがあります。

特定行為に係る研修制度の創設につきましては、「保健師助産師看護師法」を改正する法案が国会に提出され、特定行為の定義、研修の義務化が盛り込まれました。今後の看護界にとって、「看護業務の役割拡大」の大きな一歩となりました。

最後に同窓会の皆様のご活躍と同窓会の益々の発展をお祈り申し上げております。

編集委員

国立13期生　林　智世
国立17期生　福永　稚子